都立大泉高校サッカー部の歴史

都立大泉高校サッカー部OB会　　栗原正成

昭和21年に創部？。正式な部に昇格した昭和22（1947）年の初代ＯＢ・新倉雄三氏（昭和22年卒業）以来、現ＯＢ会会長・鰐川省三氏（昭和23年卒業）と同期の大竹恭鷹氏（元同窓会会長）を中心としたＯＢの協力で、サッカー部のＯＢ会は創立50周年を迎えた。

昭和20年代は、多和健雄先生（元筑波大学教授）の情熱と指導力により、都内屈指の強さで24年と27年には全国選手権、25年には国体東京代表として出場、選手権はいずれも２回戦で惜敗したが、その戦績は今も正月の高校選手権のプログラムに記されている。当時のＯＢでは国際審判員として活躍された佐藤弘氏(昭和24年卒業)、藤枝東高の監督として高校サッカー界に黄金時代を築いた長池実氏(昭和25年卒業・故人）などを輩出している。

その後、永島正俊先生（現日本大学教授、日本協会規律・フェアプレー委員長、元国際審判員）の指導のもと昭和30年代には関東大会の常連校となり、38年には３位の成績を残している。当時のＯＢの多くは教育大（現筑波大）に進み、現在でも高校、大学の指導者として活躍している。なかでも田村誠氏（昭和37年卒業、現横浜国大教授）は当時のスポーツ新聞にサッカー界の柏鵬時代、西の釜本、東の田村という記事で話題を呼び、同期の高田久行氏（昭和37年卒業）は全国高体連サッカー部部長の重責を担っている。

昭和40年代から平成にかけては、清水貞事先生が熱心に指導されたが、折からの大学受験競争の激化による部員の退部や、私立勢の台頭のため、あと一歩というところで東京代表を逃した年が数回あったが、国体の都選抜チームに３年連続１名選ばれ、中でも藤波秀雄氏（昭和46年卒業）は副主将として東京をベスト８に進める活躍をした。清水監督のもとでは、松尾尚之氏（昭和49年卒業）の時代、竹田博氏(昭和51年卒業)、田川憲司氏(昭和53年卒業）の時代にいずれも東京都予選でベスト４へ進出した。部員数の確保の問題と都立高校というハンディにもかかわらず、ベスト４の常連校となれたのは、監督を中心にＯＢの協力があればこそで、これが大泉高校サッカー部が50年もの長きにわたり、築き上げてきた伝統である。

現在は、清水先生からバトンを受けた、若い指導者沢辺朋史先生の指導のもと、Ｊリーグの発足によるサッカー熱の高まりを受け、大世帯（部員数四十数名）での練習に苦労しいるが、久しぶりに平成４年に選手権予選Ｂブロックのベスト８まで進出することができ、伝統の大泉高校サッカー部の復活の兆しが見えてきた。近年若いＯＢが母校のグラウンドに足を運ぶ機会が減り少し寂しいが、長い間現役のコーチを務めていただいた小川皓司氏(昭和33年卒業)のように、まだまだ現役でサッカーをしているＯＢの方々や、社会人リーグで活動しているＦＣ大泉というＯＢのチームもある。また毎年ＯＢ総会が４月に開催され、ＯＢ同士の親交を図るとともに、現役への激励としてユニホームの贈呈を行っている。平成７年度は日本赤十字社を通じて阪神大震

良き時代の早稲田高等学院サッカー部

早稲田高等学院教諭　　福島正秀

わが学院のサッカー部は全国高等学校サッカー選手権１回、総合体育大会２回、関東大会６回、単独チーム時代の国体関東予選１回など、昭和30年代から40年代前半には毎年のように東京代表として各種の大会に出た。総体ではベスト16、関東大会３位などの成績もある。その他にも代表決定戦まで行って惜しくも負けた試合も数多くあった。現在はサッカーがこれだけ普及し、レベルが上がりなかなかチャンスに恵まれないが、その時代に果たせることはすべてやってきたと思う。

良き時代の話をすれば昭和42（1967）年の福井、43年の広島総体にはＯＢとして連続出場したが、大学生だった私は、当時お元気だった早稲田大学の監督で、現在サッカー界のトップで重要な働きをしている多くの人を育てた名伯楽の工藤さんにはたいへんなご援助をいただいた。大学の練習では怖かったようで、亡くなられた後、あの釜本さんをして、「一度でいいからほめてほしかった」とテレビのインタビューに対して言わしめた工藤さんは、晩年、駅の反対側の自宅からグラウンドに来る時、東伏見の踏切で線路の小さな石を拾ってポケットに詰めて来たりしてサボっている選手の足元に当てたこともあったとか。

その大監督工藤さんが学院生には好々爺のように優しく、また懇切丁寧に教えてくださり、また何度も直接お手紙をいただいたものである。その当時まだ高校では行われていなかった４ＦＢ、あるいはスイーパーを置くやり方を指導いただいた。それを元に私は、当時早稲田大学のコーチだった安田一男氏の助言もいただき、最初４－２－４を試したが、選手の質問にも答えられないくらい知識がなかった。特に悩んだのは当時の主流WMフォーメーションが、四段構えだったのに対し、三列でどう守るかということだった。

そこで４－２－４をあきらめ、守備のときは逆サイドのＦＷが中盤の守備にも参加する４－３－３システムを考えた。勢いＦＷは２人しか残らないので今やっているようなツートップ、４－４－２で半年やってやっと慣れ、それからＦＢの攻撃参加も含む独自の４－３－３を行えるに至った。ただ、当時の選手にＦＷも守れ、ＤＦも攻めろというのは酷で、選手と喧嘩しながらの毎日だった。

当時わずかな情報しかなかったが、ヨーロッパチャンピオンズカップで連勝していたインター・ミラノのやり方まで研究し、ファケッティというＦＢが得点王だということまで説明した。当時の教育大が成田監督のもと、そのやり方で大学リーグに連勝したのも記憶している。

しかし半年後、選手が「言われていたことがやっとわかりました」と言い出してからは面白いように勝てるようになった。かなり最近になってツートップが高校でも主流になってきたとき、力がなくて上位では勝てなかったが、いち早くこなしていたのは学院ではないかとひそかに自負したものだった。

災の義援金の寄付などの活動もした。大泉高校のサッカー部は、練習が厳しく、３年まで残る部員は本当にサッカーが心から好きなものだけである。サッカー部のＯＢは今でもボールを蹴るのが大好きという人間の集まりで、自分の母校に愛着と誇りをもっている。そして、後輩たちの活躍を何よりも楽しみに待っている。

■全国高等学校サッカー選手権大会東京都予選

年　度	1　位	2　位	3　位		全国大会での順位
昭和22	都立五中（小石川）	高師附中			1回戦敗退
23	都立北園高		五商高		
24	都立大泉高	都立小石川高	教大附高		ベスト8
25	都立北園高	都立大泉高	教大附高	開成高	ベスト8
26	都立北園高				
27	都立大泉高				2回戦敗退
28	都立豊多摩高				1回戦敗退
29	青山学院高				1回戦敗退
30	朝鮮高	都立石神井高			3位
31	青山学院高				ベスト8
32	私立城北高	教大附高	都立江戸川高	都立豊多摩高	2回戦敗退
33	暁星高				2回戦敗退
34	教大附高				3位
35	私立城北高	教大附高	海城高	学習院高	1回戦敗退
36	帝京高	教大附高	育英工高	都立井草高	ベスト8
37	早大学院高	帝京高	私立城北高	青山学院高	
38	私立城北高	教大附高	都立井草高	早大学院高	
39	帝京高	都立井草高	私立城北高	都立小石川高	
40	帝京高	私立城北高	都立西高	早大学院高	
41	帝京高	私立城北高	本郷高	学習院高	代表なし
42	帝京高	教大附高	私立城北高	都立日比谷高	
43					推薦なし
44					推薦なし
45	帝京高	本郷高			
46	帝京高	桐朋高	私立城北高	中大付高	3位
47	帝京高	本郷高	国学院久我山高	都立杉並工高	3位
48	本郷高	帝京高	学習院高	早実高	
49	帝京高	国学院久我山高	都立小石川高	私立城北高	帝京優勝
50	本郷高	帝京高	都立久留米高	国学院久我山高	
51	帝京高	本郷高	都立石神井高	都立西高	帝京3位、首都圏開催となる
52	帝京高	修徳高	都立大泉高	国学院久我山高	帝京優勝

■関東高校サッカー大会東京予選

年　度	1　位	2　位	3　位		参加チーム数	関東大会での順位
昭和33	教大附高	私立城北高	海城高	都立北園高		
34	早大学院高	都立江戸川高	私立城北高	帝京高		
35	都立大泉高	早大学院高	私立城北高	帝京高		
36	私立城北高	都立大泉高	都立小石川高	教大附高		小石川３位
37	早大学院高	帝京高	私立城北高	都立小石川高		
38	私立城北高	都立井草高	教大附高	都立大泉高		大泉３位
39	私立城北高	都立井草高	帝京高	成蹊高		私立城北３位
40	私立城北高	早大学院高	帝京高	都立大泉高		帝京２位
41	私立城北高	都立北園高	都立秋川高	学習院高		
42	私立城北高	早大学院高				早大学院３位
43	早大学院	中大付高	東工大附高	都立烏山工高		
44	学習院高	私立城北高				
45	帝京高	都立石神井高				石神井２位
46	帝京高	都立田無工高	明法高	桐朋高		
47	私立城北高	都立杉並高	帝京高	桐朋高		
48	本郷高	都立鷺宮高	都立大泉高	帝京高		
49	帝京高	中大付高	早実高	本郷高		帝京３位
50	中大付高	帝京高	都立玉川高	本郷高		
51	帝京高	駒大高	修徳高	暁星高		
52	本郷高	学習院高	駒大高	修徳高		本郷２位
53	帝京高	早実高	国学院久我山高	都立富士高		国学院久我山３位
54	修徳高	農大一高	私立城北高	都立駒場高		
55	帝京高	修徳高	都立駒場高	都立狛江高		帝京３位
56	帝京高	国学院久我山高	正則学園高	暁星高		帝京３位
57	暁星高	桐朋高	本郷高	都立駒場高		暁星３位
58	帝京高	中大付高	暁星高	桐朋高		帝京優勝
59	暁星高	帝京高	桐朋高	国学院久我山高		帝京優勝
60	正則学園高	本郷高	修徳高	都立駒場高		正則学園優勝 修徳２位
61	帝京高	修徳高	暁星高	都立三鷹高		帝京優勝 修徳３位
62	暁星高	帝京高	堀越高	本郷高		帝京２位 暁星高３位
63	修徳高	帝京高	駒大高	堀越高		帝京３位
平成元	堀越高	暁星高	帝京高	都立石神井高		暁星３位
2	堀越高	都立久留米高	東海大菅生高	桐朋高		堀越３位
3	帝京高	堀越高	修徳高	暁星高		
4	暁星高	都立久留米高	修徳高	堀越高		
5	帝京高	堀越高	東海大菅生高	昭和第一高		帝京２位 菅生３位
6	暁星高	帝京高	早実高	修徳高		
7	帝京高	修徳高	私立城北高	堀越高		帝京３位

注：昭和60年の修徳高は第２代表決定戦により出場